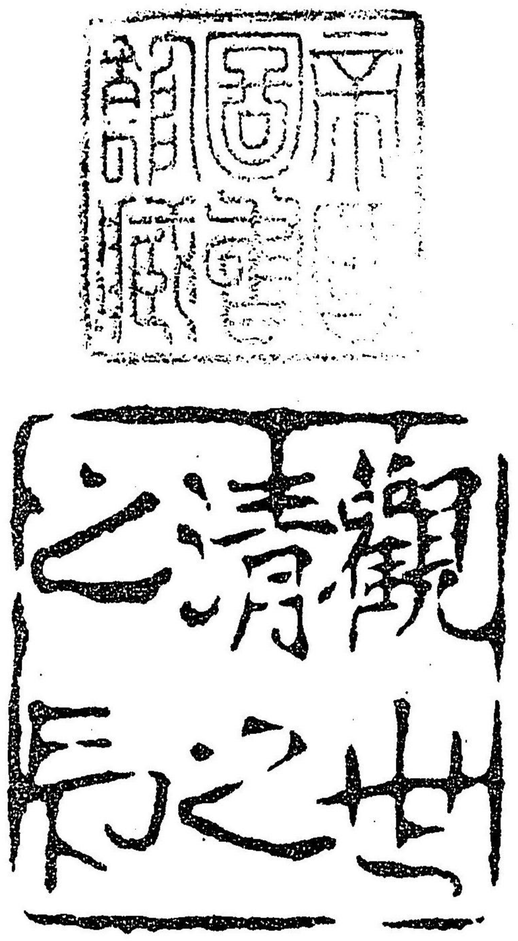
觀世流改訂謠本

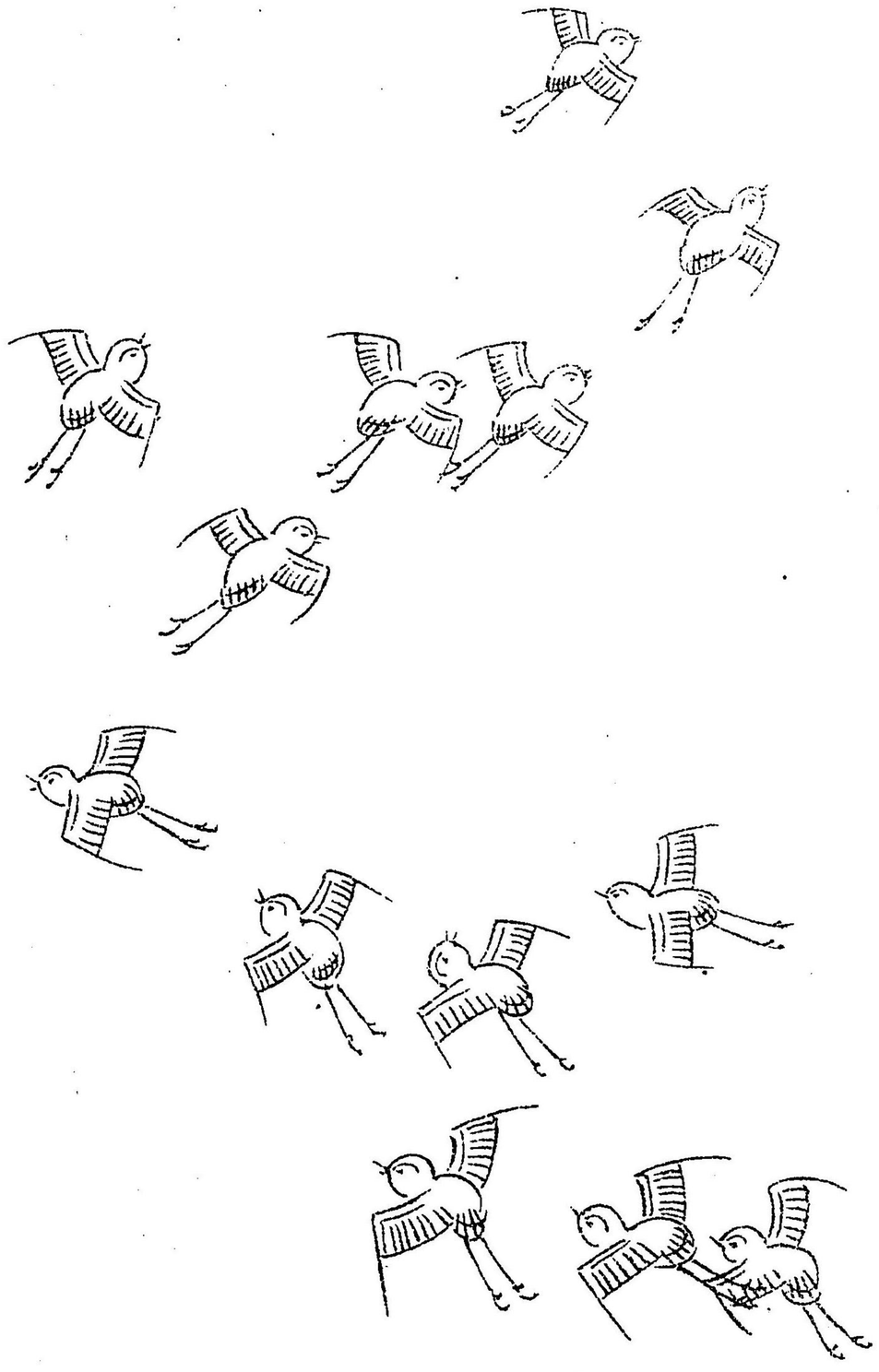
內 十五

皇帝
通盛
松垣
櫻川
山姥

246
18
198


觀清之世

明治
43. 5. 31
内交



文學博士　井上頼圀　本文監修
丸岡　桂　本文訂正
観世清之　節附訂正

五番目ヨリ末
畧脇能

早ヨリ

春は来て人も花も春と
なれども君し帰らぬ
三月の
三月
シテ　楊貴妃
ワキ　鬼神
ツレ　玄宗皇帝
ツレ　大臣

帝

後宮三千人
三千人の寵
愛一身にあつまる
紅粉黛
紅粉黛
の力もあり
命もあり
心づくしの春の

夜の月も隠れて雲
居よりなる雁ぐねもわが妻よりも鳴き
渡る。霞のうちに揺ひろへよ情
しき。深うなく
いろ奏南申
べきなれ
りわきびて心を澄ましたうよ
階の下より見れば
ある老人あり。そも何いうある者ぞ
これ伯父の中時より鐘撞こひ者
なりしが。及第高くぬるを歌きぬ
階まで頭をかたむけ伏を倦なな
し者の。亡心これまでまりたり
ばさるうを間きまり。其まま都
のうちより幕め。贈官せられ大臣

の。其亡心の行のなり。但今てよ来れるぞ　けよく知ろ見されたり。贈官のみう縁袍と。死骸よ蒙る用恩よ。今如く居の寵愛し行よ。貴妃の病と辛らげて。奇特と見せしめ中まべ。然らぞ件れ用る境と。かの御枕よ立て置き法ぞ。又ぞ深と

現さんと、上皇、直奏かたく申しぶべく。われ用力と起つ。楊貴妃の死と深侍に心と静めんと。やしもあへぞ長深中階のもよ。失せよけりく。いろ貴妃。はいろう屋の日の。暮ろうべも隙日位の晴れぬ心いうるぞ。ばよや衣と取り。枕と推まべき力もあく。

若き心よさまもぬる涙の露れむ
憂ひ深い恋ゆえ　早かれかしと代るも代るも
のかぎ　若みを見るべきかと
と添へて水仙の髪をも上げ
ぎ　ひれふまも　翠黛金粧
ぞ　ぞ　ぞ　ぞ　花もうつろ　花破
の斜　の　の　の　の　の　の　の

春雨の門は蔦に蒙れ眠れる花
の如く　花　月　梅　花と極
めせと保ち色と重んじ　ぞ
ぐひなき貴妃よ　ぞ　ぞ　ぞ
月の春宵　と　ぞ　ぞ　ぞ
起き出で　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ
なき中なれど　ぞ　ぞ　ぞ　ぞ

中に思ひぬ清り有りの月に新し家
楽まで遊び殘せる方もなく。秘曲
伝へし笛吹けば。とぶきあれやとれ
契り。天長く地久しくと畫くる時も
あらまで。けふ今思ひ出だたり。
かれ老びの数のやや。明日鏡を取り
出だ。れ作枕は置くべきなり

上大臣
加藤清正
東海道
弥生
帳
上臣
急元入
早苗
九華の帳を押

し深けて。ぬれ序拾はよりけれ。
笛をおつ取りさしあげて。男々喜ぶ
甚氣色。鏡よりうつり見えければ。帝
いとれと感じあつて。さても病鬼よ
指さしと。剣を抜いて。立ち向へ。
そ。地よりとり。乗行自在と限りて。
帝よ向ひ。怒をあせざ。敵をふり上

げ斬り捨へば。ぬれ殺の極よ立ち憑れて
海も見えぬ。はせよけり。早上と静へ
曇る空晴れて。宮中さりかやきて。
鳴動まることを忍ろけれ。大慮そも
そもこれ武徳中よ賜宮せれ
し。鐘馗だのの。精霊なり。さても汝
居鬼愛し。汝の病をたひら

げんと。面力をいつて寺端を見まも。
南無天満宮菩薩。
を。駒よ。家。屋宮を翔て来
四せり
急上 悪鬼
く。弱き。弱き。弱れ。真木なる。憑
れけるを。童姫の精霊馬より下り
立ち。利剣を掲げ袂をおさへ。

て怨み。貴妃も思ひ入れて居の。恵
を仰ぎ。守れやと。るべしと。祈
を。なり。て。深い夢とぞ。
ありける

七月ツレワキ　平通盛前ハ漁翁
小宰相局前ハ女
僧

早は
これ河波の鳥門より一夏を送る僧
なれども。さても沈浦。年家の一門も
て落ちたる哀れ。痛わしなど。
海人沈潜四方出でて所を侍ふ
りの。今も出でぬ。思ひ申さずやと
思ふ。磯辺。岩根に待つ

二うミ
程よく作り海を白波よ。打寄せ
ねと鳴門の浦静かなる。今宵うかく
まさに来る寺の鐘。沈深迄間
えて　拍子
あく暮る月数うか　きのふまぎ
けふと暮れ　明日亦もとそあるべ
けれ　されども老よ頼まぬ　乳

行く末の日数あり　いつまでせとばわ
づ海のあまりよ深も。波おぶ　浪を
頼みよ。老ひ月の　命ひ　なるよつふ
べきやうきあるこ。心のか　慰むく。
月の出汐　海ふぶ。さも面白き浦の
秋の気色ろ。浮ひ浪の鳴門　沖
よ雲つづく。淡路の鳴や　部れそぬ

の葉ぞ悲しき　晴渡りて月を
埋んで清きそらの面　海士
の篝火更けぬるぞ。二人とよりくぐる夜
雨の芦間を通る。音まで。音まる
ものも皆枕よ。苫ゥ現ゥお絵の聲は。
風よりて間もなく。揚音と静め
かろうを抑へて。藤間さぞやと思ひ

早上
たそも沖潟門のけよ音まるい　泊定
めぬ海士釣舟よ　さもあるぞ思
ふ仔細あり。沖潟の深き寄せ波　俳
よ造ひさ寄せ見れば　二人の優い
巖の上　通れ舟の張　蘆火の
張りそめよ。お絵と問き讀傳まる
ありがたい海まる。葉に蘆火と思ひ

一早一よき燈火よりて鳥門の海の弘
法寺深川海潮切ふつきて樣子よりは
て五十度ばかりの船喜切徳兵衛
ありがたや汐路のれもそで晴き南門に
も蘆火に歌ひて立て藤間まる
ぞありがたきを龍女衰盛と同く時
ゆ燒も頼もやおぼろいふよ及

一甲子ずま殿ひも三つ車の蘆火清く
あまべ牧お經ぎをく
早川
あ〜姉やばの火の光よて心靜るよ門
經と債火宝りてのまづ〜汐浦八年
家の一門まて法ひたる奇ねば毎夜
汐彼ばよ出でて門經を債火まりと
りなきいろるの人汐浦のまて法ひ

てんぞ奇〳〵ことわざりゐへ仆の如く
或ハ討たれ又ハ海へ海へも流み溺ひて。中よ
も小宰相局とそ。諸共ことわざりゐへ
さる程よ年家の一門馬上とあるなる海
元又元又元又

そで沈はまぎらめ　中　しべき月はいよ
や海のうねてうかむらん　西と向へば月
はいらぬ。其方も見えぎ大方の春れ
やや霞むらん海も共に星つらん。彼母
あく取り付きて。汝時のお思ひ君一
人よりらぎ。思ひめ　とまり泊へと古夜
の袖を取り付く。振り切り海へ入ると

静　見て老人も同じ満潮の底の水屑と
なりよけり　早上　汝は袖の捨言して。
中人待謡
くも浦らさじ。方便品を賣浦
早上　貴方　後シテ上
きら　妙法蓮華経　春を満潮
早　但物衆生　見て帰　上地　合　帰
帰お宿よりて。汝
早丸　早上
りがたの中法やあ　ぎやるさも艶

めりて浦深く波は落ちて見え渡りたり
ある人すてまゝ（ツレ女）
まだ消えぬ波の門（ツレ）
波みなぎりて。ホ（ツレ）
今一人（ツレ）
えぞ渡りたるある人（ツレ）
れい生田の森の合戰（ツレ）

ナ

ヤ

ガ

ヤ

ガ

ヤ

ガ

たりさう。面目感もはなはだ。たりしが。あんで
ぬぐ。涕を。ふりぬぐひ。ぬぐ。涕を。ふりぬぐひ。
で。屋根の高き。所に。のぼり。
分に。面目感。なくて。けらもつ。頼もしき人
なし。われ。もくもくなる。ぞ。却て。
り。ぬぐ。涕。ぬぐ。涕。
石。猿。猪。ぬぐ。涕。面目感。酌。とり。ぬぐ。

盃の。宵。に。何。も。ぬぐ。涕。
ぬぐ。涕。
ぬぐ。涕。土の。頂。羽。高。狙。の。攻。を。受
け。數。行。屋。氏。ぐ。涙。もこれ。いで。優
べき。猪。暗。して。月。は。そ。さ。て。
傷。り。慰。む。處。よ。
ち。も。甲。冑。とよ。ろ。ひ。つ。面。目。感。いづく。
ぞ。ぬぐ。屋。ぬぐ。涕。ぬぐ。涕。ぞ。はり。

其勢れ、あり、恥ちゝや、拙者の学、わづ、
かに、ひるがゝ、他人より、劣て、恥ちゝや、服中
して、きゝぞ、そ、行られぬ、この谷
の、中、須磨の、浦、後髪、ぞ、ふる、て
さる程に、合戦も、半ば、わぞ、但馬
程、経政もまた、討たれぬと、聞中、さて、薩
摩の、学、忠度の、きて、いるよ、岡部、は、
弱、忠度と、組んで、討たれしらべ、天晴、通
盛、名ある、侍、もがな、ひるが、死せんと、待つ、所
に、まれ、あれと、見て、よよき、敵よ、と、思ひ、岡
部、人、よ、まれ、の、深、五重、章ぐ、鞭、と、上
げて、駆け、まち、面、盛、も、落ぐ、ぞ、抜き
投げ、たら、ば、力、の、ぬ、ば、中、の、真、ちゝ、
と、おち、ぬ、ま、ば、力、の、そ、さ、準、へ、ば、

檜垣

シテ　檜垣姫前・老女
ワキ　僧

昔は、これ肥後の國岩戸と申まします居住の僧にてはべりしが、世を背き、霊験殊勝の由聞えし檜垣の女の跡、可敬景と見えたる。南西は海雲漫々として、萬古忘れがたく、人待顔にて慰み多く、敬景

世界道の苦を受くる。撫みをたれ、海ひろく弔ひたびたまへ。——讀經の聲を聞く時、惡鬼心を和らげ、厚業悲の海をのぞ。業障もこよ。来迎まし。成佛得脫の月と成り行くぞ。ありがたきかな。

あつて郷里へ去らんとす。真よ住むべき處
地と思ひて。三年ら間居住仕りて。
こゝ久百よも及ぶらんとおぼつき老
母。毎日閑伽の水を汲みて来りし。今
日も来りてゆきて。いつまでも者そと名
と尋ねそやと思ひ、第女 [illegible] 白河
水汲めど。日も疎や濡らまらん

サシ

それ龍島い雲や底ひ。帰雁雁い友を
恋ふ。向も亦これ同。貧家よい親
知らず。貧きよい妻人疎し。老悲哀
に形もなし。露命窮まつて霜塚よ似
たり。流る水れあそれせの其理を
汲みて知る。とこ所も白河のウ。
水きゝ深き其罪を。浮ろみやまと指

元二

人々。紀遍を連て京のぼりに
よ着きよけりぬ。下庵よ着きよけり

いつもの如くけもの亦ほとけて来

早

毎年老女の歩み遅まく

女

も痛そうそそ。せめてなれ

うけ。そそ。おし罪も出る

べけれ。でらん。跡ひ法ひ。明

けぬそ又寄りぬべし。御服中のそん 伊勢

ぬ。月の名を名の名の法へ 女 なよと名

女

と名のれとも 早 ある人なり とれ

思ひもよらぬ仰せ。後撰集の

下二 歌よ。平ふれも 伊 紙の黒髪も白河のみち

そこもまて老いよ。ほるとと詠へ

もわそそ歌あり。昔紙前に去宰府

よ。庵は檜垣つらひて住み白柏。
後は衰へて沈白河のほとりは住み
なり（平カ九）はよさるやうと聞きまゐり。其
白河はいとりもあたりは藤原の興範
通りし時（女）水あるとも出せ給ひ
程よ。其水汲みて来るまゐりて（平）みつ
たまもとい（女）涼みまゐり（上）そもみつ

たまもと申まゐり。白河の水は
いかに。もいとめるる深さおみつたまも
と。申まゐり。其まゐるも見落さて。
如白河のほとりよりて。代り跡思ひて
ひ涼へとなまれて。出まよけり
（平）
くさていと古への檜垣の女假は
現れわれは何を出そけるそやつ

いまさへ寺持てと思ひあるも尋
ね行けも（上ニ）　あるいきや早く日も暮れ
て。（ウ）（ト）行霧深く（十）（元）（上元）（下）こちら龍もる。陰よ
庵の燈火ほのかに見ゆる。（上女役）あきき
よく
あるあるおなの男ひやな。（上）
あるあるおなの男ひやな。風緑野よ
ばまつて煙條直一。雲巖頭よ定ま

つて（上）（ト）桂まるるあり。（上）（地）紅葉あつて。せ
ゝ路よ楽しむ。（ト）（ト）（地）多よ白骨よ多
つて（女）（ト）（地）京原よ朽ちぬ。（女）（ト）（地）有馬の有板（地）
者は真（女）（ト）（地）何ら宣死の理や論せる。（元）（ト）（地）
つと（元）（ト）（地）習ひそ。（元）（ト）（地）老のつとめ（元）（ト）（地）別な
し。愛るとつて（元）（ト）（地）朝とせり作る必滅や朝（ロキカル）（ト）（地）
せさらん作らぬ。（ロキカル）（ト）（地）朝せさらん　あき

やう撥ゝ間もなきありつる人影ぽつくに
深ゝ現ぜへし。ぽつとひてまうせん
女 さうな深ゝ現して。お僧の法ゝ変くへま
ぬり。人ゝ顔しぬ深ひそうよ ワキ なるく
ゝ人ゝ顔まうまうまぱやく深
ゝ見え深へ 女 深昼りれ顔せせそ
れるも見えぬ喜へゝ。沼白河のみゝ

くも。恋の深そ恥ずき ワキ あるう痛ゝ
しれ古有様やう。今も執心水を波ゝ。
痛ゝの深見えぬ深ゝそやゝ。ゝ深
ゝ波へ 女 われ古人ゝ様女の墓せる
勝れ其罪深きゆるよりぷりも若
しみゝ三瀬河ゝ執鐵の桶ゝよるゝ。
猛火れ釣瓶ゝ提げて汲水を波む。

中　其水湯とあつて沸り立て身を焼くが如
もあれども沈淪お僧の知遇より
れて釣瓶なれども猛火なれ　早上　き
らそ因果の水を汲み其執心を
捨てつくく深き淵へ　女詞　いそく
さそそ、お僧のため沸り水を汲み乾　早上
さそ罪も深く深くるべきと思へも

深き小夜衣の袖の露の玉襷　女　影
白河の月夜　早　底沈む水を　女　いき
汲まん　釣瓶の水に影落ちて袖
と月や昇らん　元　残星影
小深き水を汲み後世の爐に南
顔の深を焚く　斉　それ氷の水より
出て水もまた寒く青き苔蔭に

り出て蔭より深し。おれ憂き身
の報いるべき。今はれ若みたりも
せて いや増りぬる思ひの色く
れるるれ涙よ身をとめ約束
の懸縄とり返し憂き古へも花
れ春の朝紅葉の秋の夕暮も一日
の夢とそやなりぬ。顔の粧ひ華
女れ暮もいとはしそめて。さも美しき紅顔
の翡翠れ髪花しおれ。桂れ眉も
霜降りて。水に映る面影老悴。影
流んで緑に見えて黒髪い土水れ
藻屑塵芥。変りける身れ有様
悲しきぞ。よやあり。せて思ひ出
れそなつかや。其白のれ波わけ

上女

藤原の興範の。長女への白拍子。今
一方とあるしかた。昔の花れ袖。今度
色も麻衣。袖と返て得ぬ心そ
つゝき陸奥の。希婦れ細布陶あそ
き。ゆとか白拍子。長面影のあらへき。
よゝそれそても。昔手別れ。常
なれそ。常そてあも今い適ふまとと

上女

興範頼より宣へて。あきまいなる麻の
袖露うち拂ひ常ひ出なそ 檜垣
の女。身のそて。水掬ふ。釣瓶の
縄の釣瓶の縄の。繰り返し 昔よ
帰し白川の波白河川
水流哀を知る。名よ。まそ現れ
出そたるあり 運よあたつれ。昔

上女

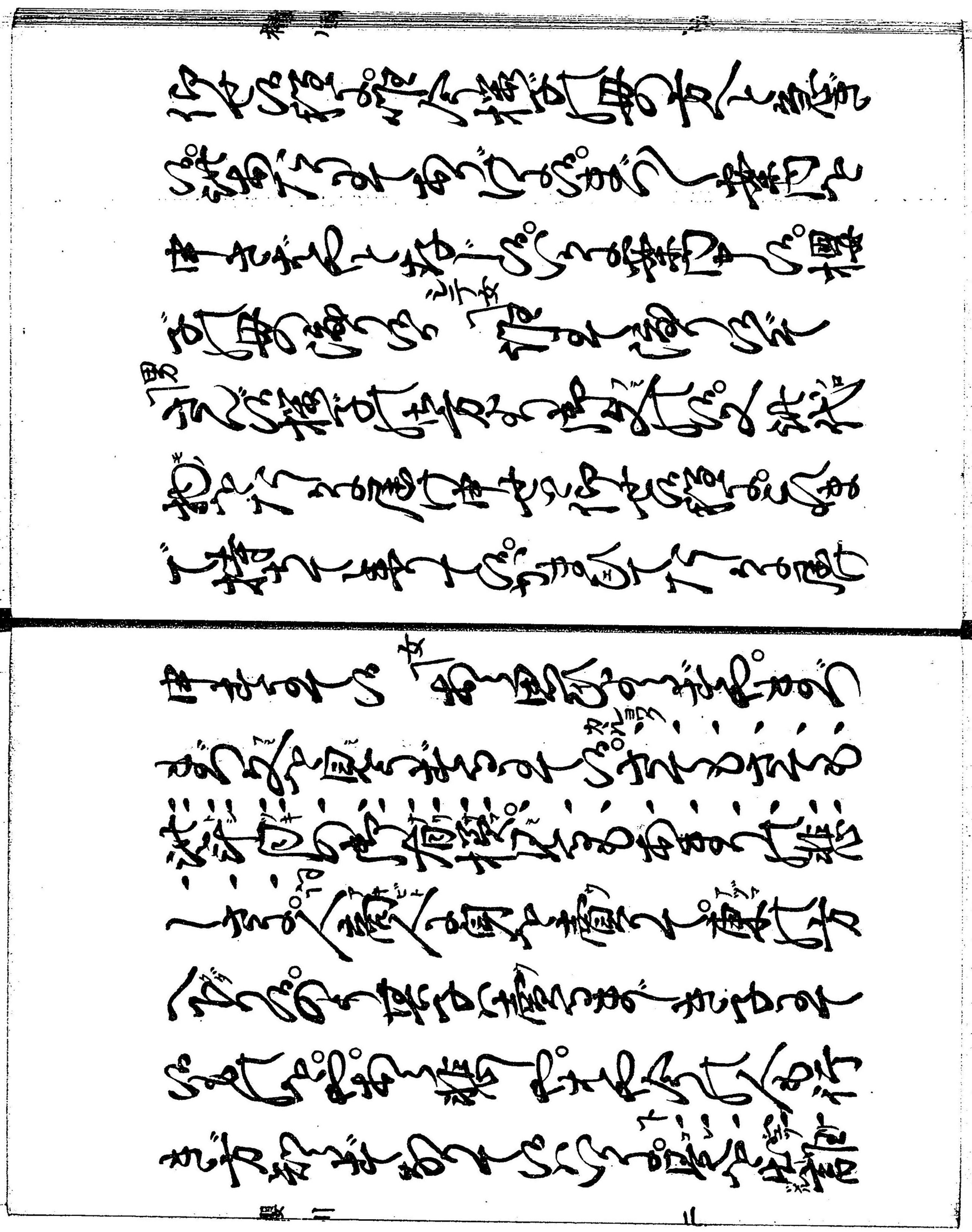
とゝ絶ゆれ流るゝ水に運びて来
らまる罪を浮うめて泊ひ給へ

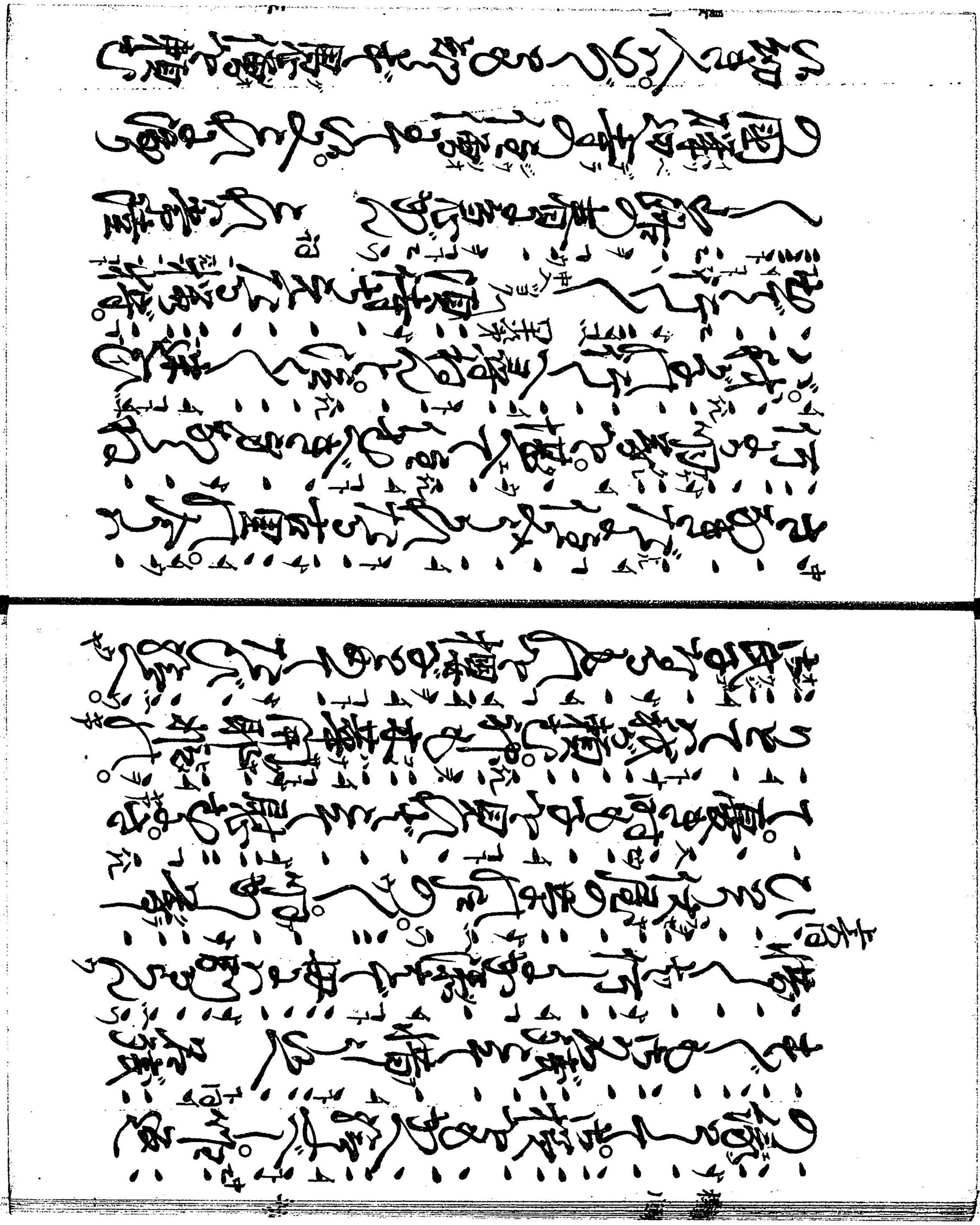
櫻川

三月

ワキ　僧
シテ　櫻里人狂子
ツレ　商人
ツレ　文人
ツレ　子人

男詞　やうは有り。東国方の人高人なる
ぞ。われ〳〵都より此度い流浪
日向よまゐりてゞ。よきの者の者程
よ幼き人を置て来てゞ。かの人ゆきれ
いぶぞ文と申す代と。櫻川馬場に有る
て櫻ぞ冊て尋ねてゞ。うるよ問けよと





由仰せられ師匠契約とお申して
いる。又洗濯たらよ櫻ゞとて花の命はれいる。
今も風の由は程よ。幼き人と伴ひ作
今櫻ゞへと急ぎ行くは。花吹雪とのも
如何もの花風く。雲の林の影薄き。緑
の宮もうつりや松は緑色も春めき
て。何も浮かむ花の波。櫻ゞよもうまき

上ノ句

ハ

ハ

ハ

げらるまぎれなる柏ぶ。それは柏
くぶ。ぶて。汝わが柏と幼き人なも見
せまうさられぬへ　平　きらだそのわが柏
と汝方へめきれぬへ　男　心得ぬやあ
かのわが柏よ。つもれぬく掬び掬と持
ちてこあたくまれと申へ　シテ女　一声　いる
あれある道行きべ。櫻づはお花の散り

ぶ。何散りがたなよなりたるとの。悲しやお
さなきだよ行くやまき春の水流
るる花とも儚ぶらん花散れる水のまま
まとめくれぬよ。春あるありはけ
りと同時。ありとも何ぶ。花は
踏く雲色。櫻花散りぶ。
おぶりよ　地　水あき宝よ。汝ぞたち

女元又　桂川

男も深き花の雪　散るは涙のしやらん

サレ女　上上

これは出でたるわざの拙さ　筑紫日向の

はるかに男ひざと共に乳る心

能登の海山越えて　箱崎に浪立出で

て須磨の海人　西公子

の海辺ぎて　常陸

とも　仁

まで　仁

ぞ　仁

遊けき旅　仁

いろはせん　ことは又名

流れたる　揺ぐ　いそ　さも面白き名　哥

あり　別れ　この名も　櫻　なれ　たた

みとしたり　名も　つ

き　櫻　散り　浮　花の雪を　汲み

て　つ　花衣　春の　なみ　強さん

上手　花　島の　まち　別れ　親　行

くへも　知　天　高の　長路　哀へ

ぞ。たつぬるに親と云て面忘れせざいらるゝ。たゞや報とそ。やごもりして見えぎそ。ウ元イキトこゝ元ザ元イキトこゝ元ザ元イキトこゝ元ザ

女「さんざわが扱弾の古郷へとぞ。木華開耶
姫と申して。ゴ郷辺櫻ゴ咲て古入り
いるさんざ別れ。待ぐるも其御氏子なれ
ど。櫻ごと名づけ育てもぞ。郷の庄名
も開耶姫。寿ぬるなれ名も櫻ごゑ。又
汝も櫻ごの名もあつうき。花の散と。
あだよもせじと思ふ。得と開け

ぞ面白やげよ行ゴ。さぞ
切書き花沙汰ゴ。東路の櫻ごま
で。下り行ゴも縁ゴ。
名ゴ名ゴ事。書きつきての名誉あ
り。その貫ぐ歌いるゴ。昔
貫ぐも。遠けき花の都より。未だ見
もぬ者陸の国ゴ。名も櫻ごゑ

女「縁ありけり。さぞ
女「まづ汝ごの

と聞きて　常よりも春べよりあれば
櫻ばかり　波の花とぞ　問ふく寄せもら
めと　ふみたれば　花の雪も　置くも古
き　花の人　寄せ　櫻ばかりの　自浪　家け
れば　霞ぞ流れ　伝ひ　島　浦　海
流るめ　水の花　ばかり　面白き　河　枝　ふく
いとゆゆしき　ばかり面白き　ばかりと　仰せらる。

はや行きて　ばかり　ばかり　ぬぞ　男　さんば　ばかり
ちまちやりもの　櫻ばかりの　散ると　中に
へで　ばかり　ばかりて　月よ　かけり
ぎるまで　早　急いで　ばかり　せ　ふく
心得ぬ　笑ひ　風　波　山　して　櫻
ばかりの　散りの　女　よ　ある　事　夕
山風の　奥　ある　花と　誘　ざめ　流れ

ぬさそよ花まくちん　早カル　げにぐ見れぞ
おほの、おぎ、ぬ、指、指よ沖き高ちて　女　花
の水屑に白ぬの　女　波うと見れば上より　女　浮
散る　櫻う　雪う　波う　花うと　女　浮
き立つ雪ぬ　上　散れぞ波
も櫻ぶ流る花やまくちん　女　花
ぬ下よ沖ら今を高れ水の雪や麦け

ならの袖　女　北流花高ちて春。
とこしなへよりう　月冴ゆ風高うし
て鶴うへらぎ　早　花水や照らし。
洞樹翠に月冴む花開けて錦よ
似たり。洞水たくへて蓋のめり　面や
思ちぎとよりあれまて花もあつみ
櫻門の樹の陰　法門の流汲みて知る名

●仕舞クセ留マデ

も所なるあひなよあひなぞ揺ぶれ。これ
仁ト　元仁ト　名ト
又他まれ縁なるべし。げにや手と行空
イ中　ヤウ　ヲ　ヤウ
て。花の鏡となるかな。散りぬるとも。曇
イ　イ　ト　中　ト　ヤウ　ヲ　ヤウ　ヲ　ヤウ　ヲ

●細の段トイフ仕舞

花をあだよるなごと水とせき雲と
くらべて浮浪の花は解うけまくも。
かたらけるやこれとても木華開耶
姫の皮弾ずれば花ぞ
咲き水も影と澄まなと袖とひた
し農裾と暮らもて花よるべれ。
水せきとめて揺げよあたら
櫻の花とぞ散るぞ怨めるも
花もしもつ散れば花ぞ諸へば
散る花葛もけ上地詠めい
ぞ青柳の糸櫻 雲の間よりもぞ
揺雲と見て三吉野の三吉野
の。三吉野の門渡龍の波の花とまく
なぐ君。国栖魚やもまつまつ揺魚

と。問くもあつて。やつぱりこれも白妙の。花も
櫻も。雪も波もみなぐるまつ。そこに集め持
ちたらんぐらも。これはまこの花真に成ぐ尋
ぬる。櫻ぐぞ。こつきぐ。

吉キ地

いろはいろは。根べの。言葉。問けぐふぐ
やな。君も。流浪の人やらん。今まぐで。
作るもいきやオ知人の。流浪人。おとのなま

ふい行のお為よ。問ぐ。

地上

「仔ろ今宮
むべき。親ぐ。契ぢ。もせぬ。花。櫻ぐぞ。

「女イ「女イ

「ぢ。ぜよ。櫻ぐ。問ぐ。夢ぐと

「甲

「上地

見もらぐぞ。いづれ。ぐ子。ぢらん。三平

の日。數。ぐ。ぐ。別。れも。ぐ。親。と。

「女

「地上

もとの。姿。ぐ。ぐ。さまぐ。見。別。れ

「女

「地上

一面。ぐ。見。ぐ。櫻ぐ

の顔でせんとなるありけり。夢幻
ふかも鳥く音こそ絶えぬ。滝ありけ
ときりげ。にたい。
ひて。手ひ立ちり。ぬ。ぬ助け
横変へて。仏果。縁とありけり。二世
安楽の縁深き。親子道ぞ。
らまり。

平次第

山姥

季ナシ　シテ　山姥
ツレ　遊女山姥
ワキ　従者

善き光ぞと。歌頼む。仏御
寄寄ねん。これ。都方よ。仕
つ者よ。これよ。流りの古事。ぬ。
酒。姥。て。隠れ。き。優女。ぞ。
ぬ。やりよ。名。申。僧。ぬ。姥。
りまりと。事。西。作。て。

ひあるよりて。京童(キヨオワランベ)に慣(ナラ)して。
又洲股(ゼンクオジ)に善光寺(ゼンクオジ)へ詣(マイ)りありたき由(ヨシ)承
りし程よ。某(ボウ)も供申し。作(サシ)今信濃の國
善光寺へと急ぎ。都を出でさ(ス)
波や。志賀(シガ)の浦(ウラ)に舟(フネ)とどめ行く。末(スエ)に有(アリ)乳
山越えて。神(カミ)よ露散る玉(タマ)の橋(ハシカ)や
けて。まあ(ヤ)る越路(コシジ)の旅思(ヲモ)ひやるこそ哀(アハレ)

あれ(アレ)。指波(シナヨ)こつ汐越(シホコシ)の。安宅(アタカ)の
松(マツ)の夕煙(ユウケム)。消(キエ)ぬよ憂きみ。罪(ツミ)を切る
ふ沈(ダ)の剱(ツルギ)の砥(トナ)ぶ。雲(クモ)踏(フム)ならずま三越(ミヤコ)
路の國(クニ)。未なる里とへば。いそ都(ミヤコ)を離(ハナ)れ
ぬる。撥(ザイ)ぶ。も着(ツ)きよりく。急
ぎ程よ。これや越後越中(ヱチウ)に接(ツヾ)
く。着きそ。暫くこれなど。

牧の道の模様をも尋ねあらうずるよ
てゝ。しかくしげよや者。彼の西方浄土や十
萬億土とやこれいう彼岸東西の直路
あれば。あげろけれども。やらんよとまりゆべし。
とてもゆく行の旅あれば。学あるべきよ
中間の置き。徒歩既にして。まりゆべし。
道まうべてたびゆく。早々あらうずるぞ。

ゆまづき日もてゆづ俗よ寄れてゆよ。さ
て何と仕りゆべき。のりく旅人お宿
まうせのり。これあげろけ山そて人
里遠き所なり。四方寄れてゆべぞ。
ゆづ庵もて一庵を切りきを結ひゆ。早々あ
時やゆ。俗の暮れ前後と忘てる。
やがてまうりぎるそて。今宵れあ

宿とまるまでの。取り別き男子は細あり。
山姥の歌の一節。偽りて問うさせ給へ。年
月の後あり鄙の男にてと男子べし。其
為なこそ目と寄きっ。古宿ともまるせて
いっさまなも偽せ給ひ。早付
男にもよるぬ。と取りはものかなさて
御と見申されて。山姥の歌の一節とい

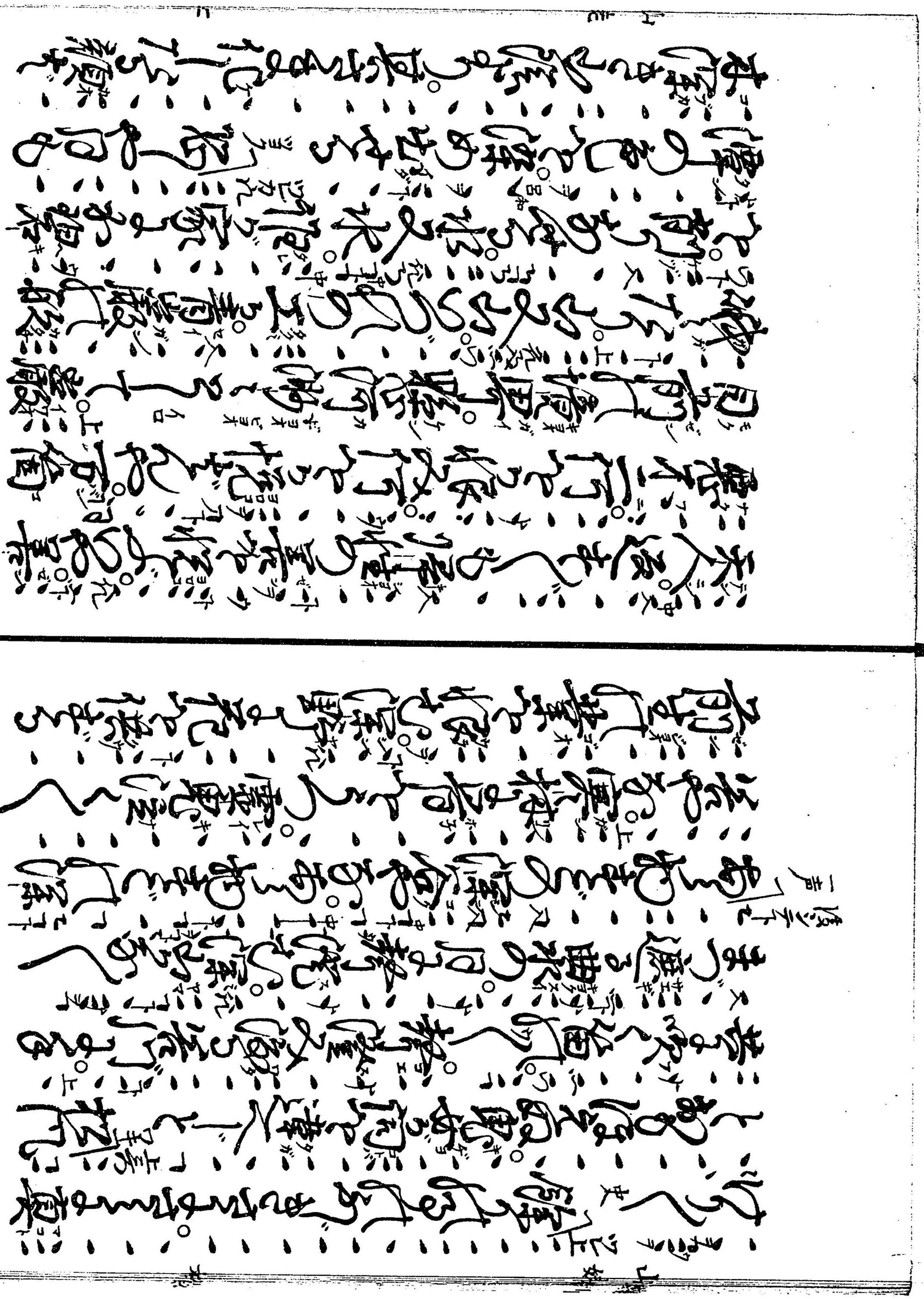
ば解なるぞいや何ら包み給ふらん。
あれなるままにまるいやくま山姥とて
隠れなき優女にまるまきぞやま
づ此歌の次第とやらんよ。見しらの山姥
ぞ。思ひまると作られたりあり面白やこ
れ曲舞よりての異名。さて真に山姥
とばいふある者とう知ろ召されてぞ

甲

山姥となる位の鬼女とこそ曲舞よも
見えそろへ　鬼女とは女の鬼とも。よ
鬼ありとも人ありとも。よく位の女ばわ
らんぐ身よりすてなきもらんぐ。わ
よいもだきを作り。言葉ぶ緊ぶ露程も。
心よいもの作り面。恨やしよ事りたり。道
を極め花を立て。せば情慮徳の物花を

同事。此一曲の扱ありまぶ。作らばわらんぐ
分ても用ひ。謡歌。音曲の物音の拵仲
ずとも。作らばなどろわらんも稽古を通
れ。物は善所よりもらざらんと　根とな
り。鳥歌も唱き法へて。拵とあげろれ
法ぶ。霊鬼これまで参りたり　ありぎ
のなを問ともらるさて寅れ山姥ぶれ

、、、



せいぜ[illegible]続いてます[illegible]ますすち　シテ　そもそ
や徳よ也で初め言の葉は氣色よも
知らめきるべしやれなる忘れ給ひそ
ツレ　されば忘るまじ　おぐらまど月間ま
ぎれより現れ出づる深河人あれども
シテ　髪よりおどろ〳〵雪やと載き　ツレ　眼の光八星
の如　シテ中　さて面のうるはしい　さるぬれ

シテ中　軒の茂り鬼の形を　ツレ　今宵始めて見
ツレ　上歌　るなり　シテ　行よなるへん　上歌　古への　鬼口
の雨に行よ　神鳴り渡ぎ忘るき　ツレ　上歌　見れば白髪
ツレ　上歌　見れば白髪　シテ中　行ぞと問ひ人ま
でも　わが身のよなるぬべき　深せ倍も
ツレ　上歌　流るやう　シテ　春れ行の一時とる人全る
暫へ　ツレ　花よ清月よ影それ願

ひのたまさあり。行きて見よ。人の一曲。その
程もあらじ。はやく。疑ひなくべし。
はるばるといふもあり。もしよるべきやうなるべ
しとも。

●サシクセ　獨吟

琴。山鳥羽とぢく。被い衾。袖
白妙。雲やとらまし。花の。侍
のことも。法ぬ。よ見ごろ。
焼ぐ。山もとるぞ。苦き。
雲。

山もとの。廣土より。起つて。天雲。
ぞの。岩。海。苦。雲。露。より。滴りて。波濤
を畳む。萬水たり。

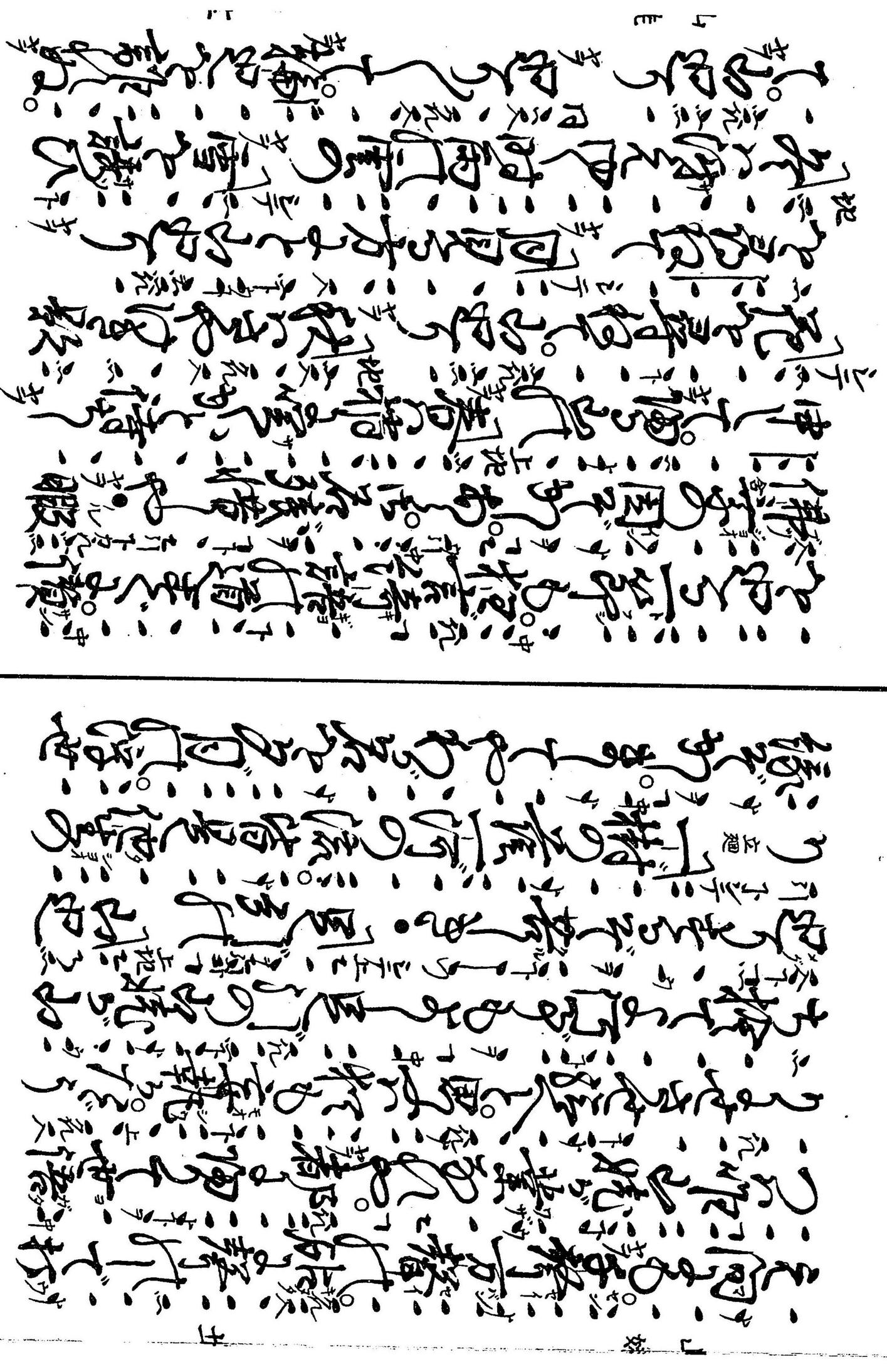
●同宮　き。岩。
琴。指。響。山。響。音。同
くなりとあり。琴。響。谷。
と。沢。もげ。やらん。そよ。
ぐ。山。家。紅。色。ぞ。海。

霧深くして水音ばかり
そよそよと風真葛が原
そよそよと風常盤
夢を破る
鞭音打ちて蛍宮
去る後は草
深くして鳥獣
名ト書過ぎたづきも知らぬ
うらぶれ子鳥の
琴凄きうらぶれ

代来りそよそよと
便りを
深き程
際よ及べども
宿もなし
奥もなし
隔つる雲の
前は海水
後は嶺
風常盤
夢を破る
鞭音打ち
蛍宮
去る後は
草
鳥獣
子鳥の
琴凄き

て。所に会ひ生れ出し女とあつて。目前よりまれ
なるも。邪正はとて見る時は色即是空
其儀は。佛法あれど。せ法あり煩悩あれ
ど菩提あり。佛あれど衆生あり衆生
あれど仏性もあり。称は緑花なれ共
の色。さて人間は格ぶ。或る時は賤
の推路は高は貴の陰は重荷は肩を

貸しはもろうもよみやとせで。果さずで送
るうもあり。又或る時は識姫は五百様
なる家よりて。なの。高系澤り紡績
は宿は分を置き人を助くる業をのみ
賤の目は見えぬ鬼とや。人のいうん
せて空蟬の唐衣拂はぬ袖は置く霜
夜寒は月は埋もれうちまきむ人の絶



246
18
198

明治四十三年五月二十日印刷
明治四十三年五月廿五日發行

東京市麹町區中六番町二十九番地
訂正兼發行者　丸岡桂

訂正者ノ檢印ナキモノハ僞版也

東京市下谷區二長町壹番地
印刷者　塚原錦三郎

東京市下谷區二長町壹番地
印刷所　凸版印刷株式會社

發行所　東京市麹町區中六番町廿九番地
觀世流改訂本刊行會
電話番町二五四四番

著作權所有
許複製